

芳地隆介戯曲集

労働者文学叢書 2

人間蒸発・人間乾期



労働者文学叢書 2

芳地隆介戯曲集

人間蒸発・人間乾期

土曜美術社

労働者文学叢書 2

人間蒸発 人間乾期

著 者 ● 芳地隆介

装幀者 ● 加藤幾恵

発行者 ● 笛木利忠

発行所 ● 土曜美術社

東京都中央区新川二丁目二八十一番 研ビル
〒一〇四 電話〇三(五五二)二七四五
振替 東京九九二九

印 刷 ● 日本美術印刷株式会社

発 行 ● 一九七六年五月二五日

定 価 ● 一五〇〇円

1393-0035-5330

人間蒸発・人間乾期

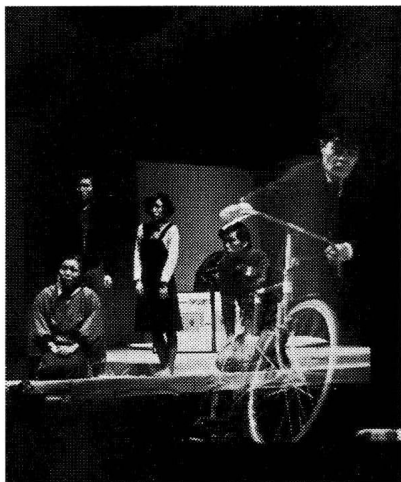
芳地隆介戯曲集

目次

人間蒸発	5
天国へ馬で行け	65
裸婦をかざれ	83
コレラにつぼん	123
第二君主国の栄光と繁栄について	171
橋のある風景	217
人間乾期	263
解説	367
林隆郎	
あとがき	378

人間蒸発（一幕三場）

—— 神田貞三作『ゾーツとする話』より ——



登場人物

吉田 松造

文江

健一

次郎

憂子

並木 主事

小山集配員

宮本集配員

山本 刑事

松野 刑事

死人 A

死人 B

メリーちゃん

集配員

読経。読経の時に使う鐘が鳴る。

一場

吉田松造の家の居間。

松造は死んでいる。

文江と健一がいる。

文江は合掌している。暫くして松造の顔に白い布をかけ、さかさ屏風で覆いをする。健一は歩き廻っている。

文江 健、少し落ち着いたらどう……、つながれた熊みたいにさ、焦々してくるよ。

健一 信じられないよ、どうしても信じられない。

文江 仕方がないじゃないか、人間には寿命ってものがあるんだよ。

健一 俺だって死にかかった人間幾らも見てきたさ、だから余計に信じられないんだよ。

文江 お父つぁんだって、こんなに早くいくとは自分でも思ってたろうよ。だけど阿弥陀さまのしなさることだもの。

健一 工場じゃ、コンベアに巻きこまれた人間もいる。ギアに腕をとられた人間もいる。だけどみんな生きてるぜ。

文 江 だから人間なんて、いつ何処でどうなるか分らないのさ。
 健 一 おやじはきつと、自分の仕事に嫌気がさしたのさ。
 文 江 馬鹿なことをいうんじゃないよ。それこそ雨の日も風の日も、四十年なんて簡単に言えるけど、なまやさしいことじゃないんだよ。それがあんなに簡単に死んじまってさ。(泣く)

憂子が帰ってくる。

憂子 お母さん。

文 江 おお憂か、今朝電報打った通りなんだよ。

憂子 どうしたの。

文 江 そうなんだよ、昨日帰って来た時、気分が悪いと言ったきり、夜中に何だか起きたような気がして目をさましたら、もう近かったんだよ。医者を呼ぶ間もどうすることもできない内に……。

憂子 それらしい様子はなかったの？

文 江 だから夕べ、御飯も喰べないで寝たきりなんだよ、パチンコでもやり過ぎたんだとばかり思っていたら……。それにそんな様子があれば、お前にだって知らせたさ。いくらうちが嫌いだって住込みで働いていても、親のまさかの時位帰ってくると思うからね。

憂子 夢を見たのよ一昨日の晩。あの無口なお父さんが、わたしに盛んに笑いかけてんの。しまい

に気味が悪くなったけど、でも黙ってるわけにもいかないし声をかけたの、でも出ないのよ声が。
ハッと目がさめたら隣りで寝ていた女の子が鼻つまんでんの。

文 江 やっぱりあるんだね虫が知らせるってこと。

憂 子 寝言いってたらしいんだ、でも丁度トイレにも行きたかったのよ。

健 一 おやじは生きるってことに、意味を持ってなかったのさ。

文 江 お前達をちゃんと育ててきてるじゃないか。

憂 子 世の中そうなってるもん。

文 江 わたしはお父つぁんと一緒になって、後悔なんかしてないよ。

健 一 おやじだって後悔しなかったさ。

憂 子 どうして死んだりなんかしたのかしら、もっと生きてても良かったのに。

そこへ次郎が来る。

次 郎 よう、来てたのか。

文 江 どうだったんだよ次郎。

次 郎 区役所はえらく待たせやがった、待たせたあげくに、死亡届だって、朝から縁起が悪いってぶつぶつ言ってるやがった。

文 江 お寺さんいたかい。

次郎　そこへいくと坊主は簡単だよ、ハイ早速、お布施は？　ときたよ。直ぐくるってよ、がっち
りしてやがる。交通事故故位じゃないと今は人が死なねえからな。

文江　口が多過ぎるよ次郎。これでみんな揃ったな、今夜はみんなでお通夜だよ。

健一　おやじ何故死んだのかな。

次郎　そりゃ六十が過ぎりゃ誰だって。

健一　どうして六十が過ぎりゃ死ぬんだい？

次郎　運命ってものがあるじゃないか。

健一　だけど死ぬ理由がないじゃないか。

次郎　自殺したわけじゃあるまいし死ぬのに理由なんかいるかい。

憂子　理由あるわよ、生きてるのがいやだって。

健一　それは考えてみたよ、だけど生きるのもいやだ、死ぬのもいやだということないかな。

憂子　生きててもみたいし、死んでもみたいということあるわね。

文江　馬鹿なことばかり言うんじゃないよ。お父つあんは最後迄お国の仕事をして死んだんだよ。

お前達も立派に育てた、心残りはないんだよ。キレイな成仏だよ。こんな往生なんてめったにな
いんだ、何だか言っても、お父つあんは一生懸命でやってきたよ。

次郎　だけどう、おやじ最後になって損したよ。もっとも損したのは俺達かもしれないがな。

憂子　何よ。

次郎　退職金だよ、俺前に聞いたことがあるんだ。勧奨退職と自己都合退職じゃ、おやじの月給で

三十万ちがうんだってさ。

憂子 本当？

文江 何だい、その勧奨だとか、自己都合というのは？

次郎 勧奨というのは退職をすすめられるのさ、その場合は退職金を割増す。だけど自分の都合で辞める時は規定通りの退職金しか貰えない。死亡退職というのは自己都合退職ということになるのさ。その差額が三十万ってわけさ。

文江 そんな馬鹿なお前……。

次郎 ちゃんと調べてあったのさ、こんなことも起るだろうって。

憂子 退職金の分け前ほしいってわけね。

次郎 権利だからな。

文江 こんな時、そんな話する人あるか。

健一 だから今頃死ななきゃよかったんだよ。

文江 健！ お前がしつかりしてくれなきゃ困るじゃないか。

次郎 兄貴にあたっても無駄だよ、規定をかえる訳にはいかないんだから。

健一 俺は退職金など当にしないよ。

文江 そらそうだよ。わたしが貰うことにきまつてるよ。

健一 おやじが何故死んだか分りさえすりゃいいんだよ。

文江 医者が来て死亡診断書をちゃんと書いて行つたじゃないか。心筋梗塞のため死亡って。同じ

ことばかり言うんじゃないよ。

健 一 不思議なんだよ。おやじはきつと自分で死んだ、さもなくや殺されたんだ。

憂 子 生きてれば退職金貰えるわね、年金もあるわ。得よね生きてる方が。

健 一 第一に死ぬ理由がない。第二に俺達を信じていた。第三に生きてる医者が死人の運命をきめる権利がない。

文 江 健！ いいかげんにしないか。

次 郎 死人にかかわっていたら生きていかれないよ馬鹿馬鹿しい。くだいな兄貴は何時までたつても。

文 江 憂、お父つあんお線香あげな、お前は一番可愛がって貰ったんだから。
憂 子 自分の娘の花嫁姿を見たいというのはどこの親も同じらしいわね。

と言いながら、松造の横たわっている方へ近寄り、屏風をのぞく。

憂 子 あれっ……。お父さんいないじゃないの。

三人振り向く。

文 江 なに言ってるんだい。(と言いながら近づいて行き、のぞいた途端ギョツとする) はっ……。

健一、次郎も近づく。健一は思わず屏風を倒す。薄団と白い布があるだけ。夫々ギョッと
する。——問——文江、くずれ折れながら泣く。

次郎　こりやどういうわけだい、俺が帰ってきた時はいたんだよちゃんと。

憂子　どういうわけ？

次郎　眠ってるような顔してやがったんだよ。

憂子　眠ってたのかしら？

次郎　バカ！　医者が死亡診断書書くわけないだろう。俺はこの目で見たんだよ診察するところも。

憂子　ああこわい、歩きだしたのかしら。

文江（泣きながら）　日頃の不信心がたたったんだよ。お前達がいけないんだよ。お前達がもっと

お父つぁんのことを考えていりゃ、こんなことにならなかったんだよ。

健一　きつと、おやじは生きてたんだよ。

文江　健一！

憂子　生き返ったんじゃないの。

文江　憂一！

次郎　そんな馬鹿なことがあるかよ。

文江　わたしもいけなかったよ。早く仏様のところへ何でもいいから刃物置いとけば良かったんだ。
ああ何ということだい、次郎、早くお寺さん呼んどいで。

次郎 死体がないんじゃ仕様がなないじゃないか、坊主だけ来たって。
 文江 ああどうしたらいいんだい、こりゃあたりだよ、何かのあたりだよ。
 憂子 生き返ったのよ。そう考えるしかないじゃないの。
 次郎 死んだものが一人で消えてなくなるなんて気味が悪い、俺はごめんだぜこんなこと。
 文江 だけど死んだんだよ、ほんとに死んだんだよ。死んだ人間がいなんだよ、それにしても……それにしても……一体。

—間—

次郎 どうする？
 健一 ……。
 憂子 ……。
 文江 ……。
 次郎 どうするんだい一体！
 健一 確かに生きていたんだよ。
 憂子 生き返ったのよ。
 次郎 (イライラしている) そんなこと言ってる場合じゃないだろう！
 死体がいないんだぜ！
 死人が居ないんじゃない